

メナシサムの厚司 メナシサムの帽子 (1)

蓮池 悦子 訳

目 次

凡例と解題

〈物 語〉

第 I 部 ポンテセウ姫の語り	
第 1 章 兄に育てられる	9
第 2 章 兄のウバシクマ (先祖譚)	10
第 3 章 イヨチへの道	12
第 II 部 イヨチびとの語り	
第 4 章 姉に育てられる	15
第 5 章 魂呼びの呪術	18
第 III 部 再びポンテセウ姫の語り	
第 6 章 イヨチの館で	19
第 7 章 入り江の向こうから	23
第 8 章 オタサム村	28

〈本 文〉

第 I 部 ポンテセウ姫の語り	
第 1 章 兄に育てられる	
1-1 平穏な日々	33
1-2 突然の独り寝	34
1-3 家事の練習	37
1-4 刺繍を独習する	38
1-5 一人前の娘になる	39
1-6 狩り上手な兄	40
第 2 章 兄のウバシクマ (先祖譚)	
2-1 村の名はポンテセウ	42
2-2 イヨチ村と親戚に	43
2-3 両親の遺言	44
2-4 突然の嫁入	46
2-5 嫁入り仕度	49
第 3 章 イヨチへの道	
3-1 乱れる心	51
3-2 若者に会おう	52
3-3 喜びあう二人	56
3-4 シラミとり	59

3-5 化け狐	61
3-6 狐と踊る	62

第II部 イヨチびとの語り

第4章 姉に育てられる

4-1 メナシサムの厚司と兜	65
4-2 姉との暮らし	67
4-3 夢見	68
4-4 目が覚めたら	73
4-5 館の外観	76
4-6 化け狐退治	78
4-7 ポンテセウ姫の死	80

第5章 魂呼びの呪術

5-1 イヨチに帰還	82
5-2 魂を迎えに行く刀	84
5-3 生き返った姫	85

第III部 再びポンテセウ姫の語り

第6章 イヨチの館で

6-1 気がついたら	89
6-2 思い惑う姫	91
6-3 イヨチ姉弟	94
6-4 イヨチ姫のウバシクマ	97
6-5 兄さまは愚かな大馬鹿者?	100
6-6 イヨチびとの判断	101
6-7 食事しながら	103
6-8 つかの間の平穏	105

第7章 入り江の向こうから

7-1 あやしい喚声	107
7-2 陸から来襲した軍勢	109
7-3 海から来た若者	111
7-4 ポンテセウびとの言い訳	114
7-5 怒るオタサムびと	117
7-6 姫の判断	120
7-7 オタサムびと来訪	122
7-8 イヨチびとの返答	128

第8章 オタサム村

8-1 別れ	131
8-2 船出	134
8-3 到着	136

(後編に続く)

凡例と解題

本ユーカラは原ノート 208 頁に筆録されており、本書は前半 100 頁までを『メナシサムの厚司 メナシサムの帽子(1)』として刊行したものです。金成マツの筆録年月日は不明です。

また、原ノート p.1 冒頭には「Menashsam un Attush Menashsam un Konchi menoko yukara」と本ユーカラのタイトルが記されております。最後の menoko yukar (婦人のユーカラ) は<女性が一人称で語るユーカラ>の意味ですが、本書の表題では割愛させていただきました。

1. 編集要綱

- ① 物語の大意を把握するために「物語 メナシサムの厚司メナシサムの帽子(1)」をつけました。
- ② 本文では原文にはない章立てを入れ見出しをつけました。
- ③ 叙事詩の 1 行を 4 段に分け、以下の要領で整理翻訳しました。

[一段目] …ローマ字原文	1	I-resu yubi
[二段目] …片仮名	イ	レス ユビ
[三段目] …分解訳	我を・育てる	その兄
[四段目] …対訳	育ての兄	

【一段目】…ローマ字原文

- (a) 叙事詩のリズムに合わせ、1 行が 4 音節ないし 5 音節に収まるよう行を改めました。但し、金成マツの文体はしばしば 1 句が 6 音節以上になることがあります。
- (b) 各行には、行数番号をつけ、原ノートの頁は本文の欄外に記しました。
- (c) 原文は人称接辞を中心に大文字で筆録されることもありますが、大文字の使用を文頭と固有名詞の頭に限定し、そのほかの大文字はすべて小文字に換えました。
- (d) 原文では人称接辞は人称語幹と結合されて示されていますが、本書ではこの境界にハイフン「-」を挿入しました。
- (e) 原文にはピリオドやコンマなどがほとんど用いられていません。本書では句読法を指示するピリオド「.」、コンマ「,」、コロン「:」「”」などを適宜補いました。
- (f) 語、助詞はその境界で切りました。ただし、助詞が連続する際はこの原則に従わないこともあります。語、助詞などが空白や改行によって途中で切断している場合はそれらの断片を結合しました。
- (g) 長大な動詞が 2 行にまたがるときは、1 行目の末尾にハイフン「-」を補いました。

なお、金成マツの綴り方については、金成まつ 筆録/金田一京助 訳注『アイヌ叙事詩 ユーカラ集 I』(1959 年 三省堂 刊行) p.19~20「V原テキストのアイヌ語」をご参照ください。

【二段目】…片仮名

- (a) 本書の片仮名はふりがなを意味しません。アイヌ語音声テキストにおける片仮名表記は耳に聞こえたとおり表記することが一般的ですが、本書では一語を分解してそれぞれ半角空きに整理しました。
例—イ レス
- (b) 金成マツの音声資料はきわめて少ないのですが、金成ノートにおけるローマ字には筆録者の発音が反映されていると推定される箇所もあります。その場合は原綴の読みをそのまま片仮名表記し (←) 内に語源分解しました。原綴で二語が一語に綴られている場合は、語間を全角空きにしてそれぞれ半角空きで語源分解しました。

例一原綴 taninne

[一段目] …tan inne

[二段目] … タニンネ (←タン インネ)

[三段目] … この 大勢の

[四段目] … この大勢の

【三段目】…分解訳

ユーカラで使われている言葉＝雅語は語源分解してこそ言葉の意味の面白さが味わえます。本書では片仮名の下段に半角空きで語源分解訳をつけ、人称接辞と語幹の間には「・」を入れました。

例一原綴 Aniyeresu

[一段目] …an-i-y-eresu

[二段目] …アニエレス (←アン イ エ レス)

[三段目] … 人々が・我を・そこで育てる

[四段目] … でわたしは育てられた

注：本書の chi+動詞+re の分解訳では、他動詞構文で自動化する接頭辞 chi-を<自身に>と訳しています。[参考：「chiibiyere (脚注：shi- 自身に通う chi- と、使役の -re とで、chi-ipiye-re=ipiye つまる、ぎっしり詰まっている) (金 I-53)」「自身に～をさせる=自身が～をする」と解釈した方が、あらゆる現象や事物に靈魂の存在を認めるアニミズム的表現ではないかと考えるからです。

また多出する chi-～a-i-ekarkar の chi- は次に来る句を名詞句化する接頭辞ととらえ、次句を a-i-ekarkar<人が、誰かが・我に・～をする>=<我は誰かに～される>と解釈しています。

【四段目】…対訳

一語としての意味は対訳でわかるよう心がけましたが、分解訳を併記してあるので、しばしば意識していることがあります。

2. 脚注と引用文献略記号

訳註に引用した文献の略号と数字は以下の出典と頁です。

研 金田一京助著『ユーカラの研究二』(東洋文庫 1931) 幌別方言話者金成マツ口述・

金田一京助筆録

研W 前掲書のうち、日高、沙流方言話者鍋沢ワカルパ口述・金田一京助筆録のもの

B ジョン・バチェラー著『アイヌ・英・和辞典第四版』(岩波書店 1938)

金 I～VIII 金成まつ筆録/金田一京助訳註『アイヌ叙事詩ユーカラ集』I～VIII (三省堂 1959～1968)

植 知里真志保著『分類アイヌ語辞典植物編・動物編』(『知里真志保著作集別巻 I』平凡社 1976)

人 知里真志保著『分類アイヌ語辞典人間編』(『知里真志保著作集別巻 II』平凡社 1975)

地 知里真志保著『地名アイヌ語小辞典』(北海道出版企画センター 1984 復刻、初出；1956)

語法 知里真志保著『アイヌ語法概説』(『知里真志保著作集 4』平凡社 1974、初出；1936)

教 I～28 金成マツ筆録/蓮池悦子ローマ字翻刻片仮名整理/萱野茂分解訳と和訳『アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズ』I～XX, 21～28 (北海道教育委員会 1979～2006)

教 29・31・34・37・40・45・46・51・54・57・60・63 金成マツ筆録/蓮池悦子訳『アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズ』29～31・34・37・40・45・46・51・54・57・60・63 (北海道教育委員会 2007～2019)

教 32 金成マツ筆録/高橋靖以・切替英雄・蓮池悦子共訳『アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズ』32 (北海道教育委員会 2009)

聖 久保寺逸彦編著『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』(岩波書店 1977)

- 久** 久保寺逸彦編『アイヌ語・日本語辞典稿』（道教委 1992）
- 萱** 萱野茂著『萱野茂のアイヌ語辞典』（三省堂 1996）
- 田** 田村すず子著『アイヌ語沙流方言辞典』（草風館 1996）
- 中** 中川裕著『アイヌ語千歳方言辞典』（草風館 1995）
- 《藤村説》** 藤村久和（北海学園大学名誉教授）解説・解説

物語 メナシサムの厚司メナシサムの帽子 (1)

第I部 ポンテセウ姫の語り

第1章 兄に育てられる

1-1 平穏な日々

p.1 育ての兄さまはわたしを懐に抱いて大切に育ててくださいました。

今、わたしがもう少し大きくなって眺めると、なんとまあわたしの住まいは美しくて立派だったことでしょうか。この大きな家の中は本当に美しく飾り付けられていました。上座のかみて側には宝壇が低い崖のようにずらりと連なっていて、その上面一帯に神々しい光がピカピカひらめいていました。その手前には一段高くつくられた台座が延びていて、その上で育ての兄さまとたった二人きりで暮らしていました。

昼になれば育ての兄さまが心をこめて煮炊きにかいがいしく立ち働き、二人でおいしく食べました。食事が終わると、育ての兄さまは刀の鞘や宝器表の彫り物に熱中しました。そのそばでわたしは一人で遊んでいました。

育ての兄さまは何度も何度もわたしの方へ向いては、ニコニコうなずきながら、**p.2**毎日毎日何事もなくおだやかに暮らしていましたが…

1-2 突然の独り寝

とある日のこと、育ての兄さまはわたしの手をとって炉端に出て来ました。右座の炉端にわたしを座らせて言うことには、「これこれ、わが可愛い妹よ。われの言うことをよくお聞き。これくらい女の子が大きくなったら、一人で寝てもいいのだよ。昔から祖先に関するウバシクマ（言い伝え）でも『女の子がこれほど大きくなってからも男と一緒に寝ているのは、本当にいけないことで恐ろしいことになる』と言っている。アイヌの慣習はこうなのだから、これからはいろいろな料理や掃除の仕方や針仕事も稽古して、そのうち一人前の娘になった時には、すぐに結婚してまことの淑女になるのだよ」と言って、火の焚き **p.3**方や料理や掃き掃除の仕方などをわたしに教えました。

日が暮れると、兄さまは右座の掛け棹（=衣桁）の下にある枕にわたしを寝かせ、たくさんのいい話でわたしをなだめてから、ご自分は遠く離れた寝台で寝ました。

突然たった一人で寝せられたものだから、本当にわたしは寂しかった。あんなにもまあ兄さまに赤ん坊みたくにピタッとくっついて寝ていたのに、人間の慣習や神々の風習はこのようなことだから、これから一人きりでわたしが寝ることになるのなら、自分がかわいそうでなかなか寝つけません。わたしは忍び泣きながら、何度も寝返りを打っていました。そうやっているうち **p.4**夜明け近くになってようやくトロトロ眠りました。

まだ暗いうちからわたしが起き出すと、兄さまはニコニコうなずきながら、「オオオオ！わが可愛い妹よ。そなたは淑女だから本当に聞きわけがよくて、ひとりで寝てもよく眠れたように思われる」と言ってお喜びになったから、わたしは内心ヒヤッとしました。

1-3 家事の練習

わたしが教えられたようにすれば本当にできるようになるとか。兄さまがお喜びになるならわたしも嬉しい。わたしはひそかに忍び笑いしながら、毎日家事に精を出し、一生懸命料理も練習して本当に上手になり

ました。

わたしが^{たかもりめし}高盛飯を兄さまに差し出すと、兄さまは受け取って高く低くささげて拝礼してから召し上がりました。そしてわたしの煮炊きは上手だと言って **p.5** ニコニコうなずいてくださったので、わたしもとても嬉しく思いました。

毎晩わたしは独り寝が寂しくて忍び泣きばかりしていたけれど、とうとうあきらめました。人の習慣はこうなのだと教えられたのだから、いつまでも泣いてばかりいたとてどうにかなるものでもありません。思い直してがまんし、それからは少しも泣かずに、本当にぐっすり眠りました。

1-4 ^{ししゅう}刺繍を独習する

眺めると、どのような生まれのどんな育ちのお方がお作りになったものなののでしょうか。右座の方にある神々しい刺繍着や色とりどりの豪華な刺繍着が上段と下段の掛け棹をたわませ、その上面一帯にたくさんの神々しい光いくつもの神彩がひらめいています。まったく面白く楽しい気分になりました。

嫁入り道具が入っている^{ながもち}長持にわたしは手を差し入れ、絹の布地を取り出して裁縫箱を自分のわきにおきました。掛け棹に **p.6** 掛かっている刺繍衣の中から造りやすそうなものを降ろして、ひっくり返してじっくりと見ながら、見よう見まねで作りはじめました。毎日夢中になって刺繍をしているうちにたちまち本当に上手になりました。

1-5 一人前の娘になる

それからいくつもの年月をおくりむかえ、今はもう肌着の襟元のひもを結ぶくらいに大きくなりました。わたしは美人であるらしく、わたしがいるそばは稲妻のように屈折した光がピカピカ照り輝き、薄いもやにわたしは包まれていました。

わたしが刺繍したものは、いくつもの神々しい雲となって立ち昇ります。

兄さまはただふつうにわたしの刺繍を感心するのであるならいいのに、わたしを見ようとしては、遠慮深くわたしのすぐ手前の所へ目を伏せて、手びさしを高く低くかざしながら、「本当にまあわが可愛い妹よ。優れた先祖の血を引く者でもあった故か、なんとまあ達者で **p.7** たまげた腕前のことよなあ。今こそあなたは国一番の刺繍の腕前になった。」と言って、いっそうわたしを可愛がりました。

兄さまも何とまあ！美男子でいらしたことでしょいか。神のようなお姿から発するもやのため光のせいで目がくらんでわたしにはよく見ることさえできません。

お互いに楽しみ合いながら、いつも変わり無く平穩に暮らしていました。

1-6 狩り上手な兄

ある時期から兄さまは狩りに出かけて、熊や鹿を何頭もたくさんとって来ました。なんとまあ獲物になってくださった神々の味はおいしかったことでしょうか。生で食べる肝臓と呼ばれているものもわたしは大好きです。いっぱい食べてわたしは丈夫になりました。

兄さまは沖漁にも出て魚もどしどし陸へ持ち帰りました。山の獲物も沖の獲物もどちらの獲物に優劣がつけられるでしょうか。全部 **p.8** 同じようにとってもおいしい。毎日珍味やごちそうであるしろみなど色々お

いしい物ばかり食べて暮らしていたところ…。

第2章 兄のウパシクマ (先祖譚)

2-1 村の名はポンテセウ

とある日のこと、兄さまがこう言いました。

「わが可愛い妹よ。よく聞きなさい。われは先に生まれた者ゆえ、われらがどんな先祖を持つ者なのか、言って聞かせよう。

われらの村の名はポンテセウという。父には兄弟がいなくて妹が一人いた。父は立派な精神で村を治め、人々を大切に可愛がった。その噂は神界ばかりでなく、人間界でも評判となっていた。

2-2 イヨチ村と親戚に

同じくまた *p.9* イヨチびとは男兄弟が自分だけで一人の妹がおり、村を治めていて同様に評判が高かった。イヨチびとは器量も度胸もあわせ持ち狩りでも漁でも上手だった。その妹も美貌^{びぼう}とともに刺繍の腕の評判が高かった。

それゆえに、わが父は妹ともども裕福で立派な男としてイヨチびとを敬愛して親しく訪ね合い、『これからは食べ合う親戚一まことの兄弟姉妹として一族同様に仲よく飲み食いし合おうぞ』と真心をもって話し合い、そのように話が決まった。

やがて、イヨチびとの妹がわがポンテセウ村に嫁入りし、われらの父上の妹である叔母上がイヨチ村に嫁入りした。われら二人はイヨチから嫁入った女性から生まれたのだ。イヨチびとにも *p.10* 男の子一人と女の子一人が生まれて、皆でかわいがり合っているうちに、アイヌの習慣はこうなのだから、われらの両親はそろって神の国へお帰りになった。

2-3 両親の遺言^{ゆいごん}

その遺言がこうあるには一われらが皆大人になったら、イヨチのわが親戚身内たちと夫婦となって先祖の館に住んで先祖に御神酒^{おみき}や供物と祈りをささげカムイノミをするがよいと。

イヨチのわが義兄妹たちもわれらと同じように教え合いながら皆で育ってきたであろう。

イヨチ村の神居に神の国から降ろされたメナシサムの厚司^{アットクシ}と *p.11* メナシサムの兜^{かぶと}や神の美しい衣装や宝物など何代もの昔から受け継いできた先祖伝来の物でわが義弟殿^{おとうと}は育てられているという。

裕福で身分ある紳士や身分高い淑女というものは相手の言葉をよく聞き入れるものなのだよ。よくよくアイヌの慣習や立派な女性の作法に習熟して、イヨチ村に嫁入りする準備をするのだよ」と、今はじめて兄さまはわたしに先祖の素性を語りました。

今はじめて、わたしがこのような祖先や親戚を持っているということを知ったので、一方では本当に嬉しかったものの、その一方ではまた悲しい気持ちになりました。

今まで知らなかったものの、立派な両親を持っていながら、少しもわたしは覚えてもいません。わたしが物心もつかないうちに、神々や人の慣習はそういうことなので、*p.12* まだ若いうちに神の国へ去ってしまったそうだから、わたしは後ろをふり向いて、たくさんの清らかな涙をはらはら落としました。

さらにまた同族もいない身寄りもいないと思っていたのに、なみたいていでない親戚もいるそうなので、内心では本当に嬉しく思いました。

2-4 突然の嫁入り

とある日のこと、また兄さまがこう言うには、「さあさあ、今日はほんとに天気もいいから、イヨチへそなたが一人で行くのだよ！そなたは、もう一人前の女性になったから、もう結婚できるのだ。『善い人というものは、婚約者同士が長い間結婚せずに離ればなれに暮らしていると、その合間に *p.13* 極悪の神、大悪神が振り向いて、本当に恐ろしいことになる』と神話にあるのだよ。さあ、そうと納得したら、嫁入り道具入れの中にそなたが持って行きたいものをいっぱいつめて、せおって早く嫁に行きなさい。われは名残惜しくても、人の慣習や神々の風習がこのようなことなのだから、さあ早く！」とおっしゃるから、わたしは心底おどろいてしまいました。

先祖の遺言どおり、わたしはいつかはイヨチ村へ嫁に行くにちがいないでも、まさかわたしがたった一人で行くとは思いませんでした。まず先にそれぞれお互いに会ってからだとばかり思っていたのに…。

兄さまは祖先のあとを継ぐひとなのに、*p.14* どうして先に兄さまが結婚せずに、突然わたしをせかして結婚させようとするのかしら？遊びすらまだよく知らないわたしなのに、どこにある村がイヨチなのか、たった一人で行けとおっしゃるから、いったいどう考えたらいいのでしょうか。わたしは心細くなり、お嫁に行くのはとっても気が進まないなあと思いました。

兄さまはたくさんのいい言葉でわたしに教えさとしてました。兄さまが話されているあいだに、わたしがお嫁に行きたくないことをわたしが話したら、どんなにかまあ気を悪くしご心配なさることかと思えば、千々にわたしの心は乱れます。

2-5 嫁入り支度

逆にまたよく考えてみれば兄さまがいたおかげで *p.15* わたしは淑女の育ちができたのであって、兄さまの言うとおりにしなかったならば、兄さまを悲しませることになるのだわと考えました。

そこでわたしは立ち上がり、嫁入り道具入れの中の首飾りや耳輪などの上等品を何でもわたしが持って行きたいものをいっぱいつめて荷づくりしてから、わたしは着がえました。美しいものばかり、新品だけの金糸銀糸の豪華な衣装をかさ襲ね着し、神の耳輪を耳にはめ、神の首かざりを首からさげ、神々しい鉢巻きでもって頭髪を高くおさえました。わたしはますます人間の姿のようではないみたいで、自分でもまことに美しいような気がしました。わたしはみづくろいして大きな荷をせおいました。

兄さまはわたしの頭を撫でさする儀礼をしてから、わたしの手をとって、館の外へ出ました。兄さまは *p.16* 物見ものみやぐら櫓の上に立ち、わたしにイヨチ村への道順をくわしく教えました。

浜手へ下る道路をわたしが通って山城からくだって行くうちに、浜辺に出ました。わたしは何度も何度も振りかえりました。わたしが振り向くたびに育ての兄さまは首骨が見えなくなるほど何度も何度も首を上下に振りながらにこにこなうずいていらっやいました。

第3章 イヨチへの道

3-1 乱れる心

それから教えられたとおり、どこまでも海辺の砂浜ぞいに行くうちに、やがて兄さまはカラスや小鳥ほどの大きさになり、とうとう見えなくなりました。

それからわたしは涙にかきくれました。それこそ *p.17* あんなにもまあ兄さまはわたしを可愛がって一生懸命育てくださったのに、もっともっと一緒に暮らしてしっかり兄さま孝行しようとばかり思っていたのに、結婚なるものをするために、もう今は兄さまと別れてお嫁に行くのだから、深い悲しみを味わいました。

それにしてもどんな生まれと育ちのお方なのか、イヨチびと一わが夫になる人とその姉上は、突然今日わたしが着いたなら、どんなにかまあ驚くことかしら？どのように自己紹介したらいいものかしら？と考えて、時々ひそかに面白く思ってもいました。

急ぎ足で歩きながら、神々がお造りになった海 *p.18* の海面を眺めました。海上はどこまでも明るく輝いていて、海鳥や沖の鳥が水にもぐって餌をあさる声がにぎやかです。まったく面白く楽しい気分でした。歩いて行きました。

3-2 若者に会う

そのうち、ようやくポンテセウ村とイヨチ村の真ん中あたりまで来たように思ったときに、はるか向こうから、霞かすみの丸い小山が一直線にやって来ました。どうやらわたしが行く方向から来たようです。

立派な女性の礼儀正しい振る舞いはこのようなものだから、わたしは海辺の山寄りの草わらまで大急ぎで行き、手前の乾いた砂地に荷物を置きその前に座り、頭を深く垂れて慎み深くかしこまりました。

p.19 髪の毛のすきまからそっと見ると、その何者かはまっすぐわたし目指して大急ぎでやって来て今わたしのすぐそばに着きました。わたしは丸い小山の濃いもやの真ん中を眼力で散らして見ました。

もやの中心にまだ年若いお方、兄さまよりは年下のように見える者が、金糸銀糸の豪華な衣装を襲ね着し、衣服の表面に話に聞いていたメナシサムの厚アットゥン司一襟や裾まわりには幅広の平金がぐるっとまわりにさがり、平金の表面にたくさんの美しい紋様豪華なうずまき紋で飾りつけられた上着—その上になぐさりのベルトを締め、*p.20* 厚司とともにピカピカ光っています。その頭にはメナシサムの兜—その兜の表面はパラパラ下がる鈴と鎖の房で飾りつけられ、神々しい光が明るく輝いていて、兜の下には神々しいお顔がさし昇る朝日のようにまぶしく照り輝いていました。手にはトゥルルの杖こがねの杖、杖の表面にはたくさんの美しい模様がぐるりと連なり、杖をもつ手さきが白子みたいに光っています。

背負い縄がついた矢筒を背おい、ゆづかに桜皮を巻いた弓の握りの真ん中を左手に握っているので、山獺に歩いている者だとわかりました。

その若者も、わたしを包む濃いもやを眼力で散らしてわたしの姿を見ようとしたのですが、わたしのからだをはっきりとは見えないように思われました。

p.21 鈴の音のようにさわやかな若者の声つきで言うことには、「これはこれは！何だか変だな。今日にかぎって、今までただの一度も狩りに出かけたことがなかったのに、今日急に狩り行きたくなった。もう夕方になっているにもかかわらず、外に出てきたのだったが、ふいにここに行きたくなった。それでこっちの方へ来たところ、どうしたことなのか？そなたは、どこの遠く離れた村の女性でいらっしゃるのか？神の身内なのか？人間の身内である女性なのか？どこから来てどこへ行こうとして来たのか？人間である女性ならば、

ひょっとしてポンテセウ姫、わが許婚者^{いいなづけ} p.22 なのか？おそれながらではあるが、一刻も早くそなたの村の名前を言って聞かせてください」とおっしゃるから、心底おどろいてしまいました。

3-3 喜び合う二人

イヨチびと一わが夫になる人と一番最初にくぐり会えたことを心の中では嬉しく思いましたが、一方では恥ずかしい気持ちもわいてきました。

おそれ慎みながら、しどろもどろに、つかえつかえ、言葉の合間に咳払いをオホンオホンはさみながら、おっしゃるとおり自分はポンテセウ姫であって、兄さまがかくかくしかじかとわたしに言い聞かせて今日イヨチへ寄こしたことを詳しく語りました。

神のようなお方は耳をそばだて一生懸命聞いていらっしゃいました。ようやくわたしが話し終わるとすぐ「いいなづけよ！」と「大事なひとよ！」と言ってわたしの肩をつかまえ p.23 わたしを抱きかかえて、「思ったとおりポンテセウ姫、わがいいなづけであった！なんとまあ、まだこわっぱに過ぎない俺ではあるが、毎日夜も昼もあなたのことばかり考えていて、早く一人前の男に俺がなり、一人前の娘にそなたがなって、少しでも早く会いたいなあとばかり思い、そなたを慕わしく思っていたのであったところ、いいあんばいにそなたの兄上のお考えがまことに正しかったから、このように早くわれらは会えたようだ。まこと神のおぼしめしによってここで他に誰ひとりいない所で、人目を気にせず水入らずで二人だけで会えたことはまことに喜ばしい。

今日俺が外へ出ずに p.24 わが館にそなたが来ても、わが育ての姉上に気後れしてこのようにあいさつの言葉をかわせなかつただろう。」と言って、わたしの頭から両肩や腕をなでました。『なるほど』とわたしも思い、本当に嬉しく思いました。「いとしいお兄さまあ！」とわたしは言いながら、彼の着物の裾の両はしを両手でつかんでかき寄せ、膝がしらから腕にかけて撫でさすりました。彼はわたしの頭を撫でさすり、かわるがわるあいさつの礼をかわしました。

3-4 シラミとり

わたしの夫になる人が言うことには、『これから狩りに行くには遅すぎる。俺はもう少しもそなたと別れたくない。ここでちょっと一休みして、うす暗くなってから一緒に連れ立ってわが館に帰ったならば、姉上はどんなにか驚き喜びまた呆れもするにちがいない。 p.25 もう少し話してきたいから、ちょっとシラミをとってくれ』と彼は言って、神からさずかった太刀を腰から外し、メナシサムの兜をぬいで、トゥルルの杖と一緒に自分のわきに置き、それから彼はわたしに膝枕しました。

そうしたので、わたしは彼の美しい髪の毛をかき分けてシラミを探しました。シラミの一匹、垢の一つも付いていません。それからわたしにおしゃべりなさいました。このように育ったことだの熱心にこまごまと詳しく語り、あるところでは二人で笑い合ったりしました。お返しにわたしも自分のことを話したら、彼は合間合間にフムツという力声を出して聞きました。

シラミもないものだから、わたしはただ彼の髪の毛をかき分け毛髪の間を搔くだけで、しばらくひっかいているうちに、わたしの婚約者はあまりにも気持ち良すぎたものだから、軽く寝息を立てて何も言わなくなったところ、わたしも突然急に眠気におそわれ、両腕の間に首をたれてコックリコックリ舟をこぎはじめ

ました。そうしているうちに、*p.26* ぐっすりと正体もなく眠り込んでしまいました。

3-5 化け狐

短い間だったのか長い間だったのか眠りこけているうちに、どれほどたった時にか、ようやくわたしは気がつきました。

それこそ非常にびっくりしたものだから、わたしは目を大きく開けて自分の膝を見たところ、まさかそんなものを見るとは思わなかったのに、わたしの婚約者だと思っていたのは、大狐一毛の間は禿^はげているみたいに毛が無く、その表面にケチャイのような毛がポヤポヤッと突っ立っていました。下あごの牙が上あごの牙に突き出ている、目の色は物狂いした人のように真っ黄色で、わたしの顔に向かってニヤニヤしながら歯をむき出しました。

わたしはとてもうす気味悪くぞっとし、それを見ただけで狂わんばかりの怒りがわき起こってきました。

「キャー、いやあ！」とわたしは叫んでパッと立ち上がりました。立ち上がりざまに見ると、あのメナシサム^{メナシサム}の厚司や *p.27* 兜も神からさずかった太刀もツルルの杖も全部無くなっていました。

自分の村の方に向かって、わたしはひた走りに引き返しました。わたしの荷物もそっくりそのまま置き去りにしたままです。よく回る投げ輪さながらに、わたしが疾走する音で耳元に風がうずまき起こります。

3-6 狐と踊る

わたしが逃げだすと、悪狐くされ狐めはわたしと先を争い、先回りしてわたしの行き先に突進し、すぐ折るかえしわたしを押し戻し、凶暴なパウパウという長く伸ばした唸り声の末尾を高く低くあげ、わたしをうわめ使いに見上げ、歯をむきだして笑いました。

と同時に、まさかそのように考えようとは思わなかったのに、ふっとわたしの心が軽くなりました。わたしはニコニコ笑って手をうち叩きながら、その狐にうなづき、すぐさま山奥の森の中へわたしが跳んで駆けこんだら、この狐は喜びすぎたのかしら？あいかかわらず耳を寝かせ *p.28* 歯をむきだして笑いながら、わたしと並んで走りました。併走しながら、強いパウという鳴き声、よわいパウという鳴き声を高い小節^{こぶし}・低い小節みたいに唸らせながら軽々と跳び上がり、腰骨をぐっと高くもちあげ、笑いながらわたしと並んで走り、跳び比べ踊り比べしました。

そのとたんにまたわたしの朦朧^{もうろう}とした意識がパッとほじけ散り、わたしは正気に戻りました。「キャー！いやあ！」と叫んで魚がつと向きを変えるさながらに浜手の方にわたしは逃げ出しました。

「兄さまよ〜！」とわたしは絶叫し、わたしの泣く声が高く響きわたっています。わたしが走り出すと、またわたしの後ろに悪狐はパウパウと鳴きながらわたしを猛然と追いかけて来て、わたしの着物の裾をくわえて引っぱりました。

それと同時にまたわたしの心がさっと軽くなり、笑いながら跳び比べ踊り比べし合いました。何十回も何百回もそのように跳ね上がる競争をしているうちに、わたしの意識は *p.29* 朦朧^{もうろう}としてきて、わけが解らなくなってしまいました。もう今はわたしは本当に何をどうしていたのでしょうか。夢まぼろしのように思いながら気が遠くなっていきました。

とあって語り手が変わる。

第Ⅱ部イヨチびとの語り

第4章 姉に育てられる

4-1 メナシサムの厚司と兜

わが姉上は、ほかにないような立派な養育をしてくださって、われらはいつも平穏に変わりなく暮らしていた。

今われが少し大きくなって眺めると、なんとまあわが館の中は美しかっただろうか。神々しい家宝が家いっばいに美しく飾りつけられ、宝壇のすぐ近くの一段高くつくられた台座の上でわれは育てられた。奥いっばいに飾られうずたかく重なっている宝壇の列が家の内壁側面に頭の高さですらり連なっている。

宝列のうちでいちばんわれが心おどらせ気に入ったのは、わが衣装であるらしい。メナシサムの豪華な^{アットゥシ}厚司一襟や裾に幅ひろの平金がぐるっとまわりにさがったもので、その上面一帯にたくさんの霊なる光いくつもの神彩が *p.30* ひらめいている。同じようにまたメナシサムの兜とともに神からさずかった太刀の鞘がそりを打っていて、トゥルルのこがねの杖といっしょにまとめて置かれていて、夜も昼も霊光が家の中いっばいに照りかがやいている。まったく面白く気持ちがいい。ああ早く一人前の男になって、わが衣装を着てみたいなあと考え、われは心の中でひそかに期待の笑みを浮かべていた。

美しい床は広やかにずらっと見渡せて、こがね色の炉ぶちが長々と出口をめざしている。わが館の中の隅々まで飾られている美しい様子を眺めながらわれは毎日毎日楽しく暮らしていた。

4-2 姉との暮らし

われは身分が高いようで薄いもやにつつまれていた。毎日毎日われは木を削るだの *p.31* おもちゃの弓や矢を作るだのして一人遊びして過ごしていた。

姉上もなんとまあ器量がよくていらしただろうか。もやにつつまれた後光のきらめきのせいで、じっくりと見ることもできないほどだ。

毎日毎日姉上は早朝から起き出し、窓のすだれを巻き上げて窓を開けてから掃除をした。掃除が終わると、水をくんでザァと指先を洗い清めた。神のお姿のようにきちんと身支度をしてから、心をこめた煮炊きにかいがいしく立ち働き、椀に高く盛り上げた飯を自分の頭のとっぺんまで持ち上げ、うやうやしくいつもわれに捧げてくれた。

姉上はなんでも上手にできるお方なので、毎日毎日針仕事に没頭し、その刺繍はいくつもの神々しい雲となって立ち昇る。その表面をわれはじっくり眺めてつくづく感心しながら *p.32* 暮らしていた。

今はもうわれも一人前の男子のすがたにすっかり成り、刀の鞘や宝器表の彫り物に熱中した。たくさんの美しい模様をわれは連ならせ、何とまあ、われはうまくなったことか。自分で造ったものでありながら、自分でも感心し気に入りながら、いつも変わり無く平穏に暮らしていたが…。

4-3 夢見

とある日のこと、夕食の後片付けを手早くすませ、われらは寝ようとして横になった。

姉上は横になるやいなや、ぐっすりと正体もなく眠り込んでしまったらしく、われは姉上の深い寝息を聞

きながら横になっていた。

われ自身は、いったいどうしてそう思うのか、少しの眠気も訪れず、こっちへごろり、あっちへごろりと、一晩じゅう寝返りを打っていた。

p.33 そうやっていて、とうとう夜が明けそうだと思っているうちに、まさかまた眠るとは思わなかったのに、ふいにぐっすりといびきをかきながら正体もなく眠り込んでしまった。

何かが目をかすめた。われは眼をこらし、上座の窓のすだれの隙間をとおして、戸外に立てられている幣壇の上をさっと見た。

祭壇の東のはずれから霞の橋が延びていた。橋にそって眼を滑らせていくと、この橋はわが里川ぞいにかみてへ延びており、橋全体がキラキラ明るく輝いていた。そこからさらに川上に目を這わせて行くうちに、山の狩り場である川端の低木林野の上で目が止まった。

林の中から何やら騒がしい叫び声がわき起こり、やがて何者かが林野のしも端にパッと飛び出してきた。

p.34 見れば、若い娘一姉上よりはずっと年下らしくみえる者が、重ね着している金糸銀糸の豪華な着物も、どうしたのか、昆布の切れ端みたいにズタズタに裂かれ、たくさんの縄束・投げ縄のように身体のまわりにブラブラぶら下がっていた。絹の帯はさんざん斬られ、着物の裾前がヒラヒラはだかっている。非常に疲れているものだから、小鳥の吐息そっくりにかほそい虫の息。今にも死にそうな顔色は土気色^{つちけいろ}で、隠すべき所も露わになっている。

すぐそばには何者かが一緒に走っていた。まさかそんなものを見とは思わなかったのに、毛のぬけた大狐一胴体はケチャイのような毛が突っ立っていて、歯ぐきをむき出し **p.35** ニヤニヤ笑いながら、パウパウという鳴き声の末尾を高く低く唸らせ、目の色は狂人のような真っ黄色だ。軽々と跳びはね、腰骨をぐっと高くもちあげながら、ずいぶん前から林野のかみでの端から林野のしも端へ、行きつ戻りつ、跳び比べ踊り比べをしていたのであった！

若い娘は今ようやく正気に返ったものらしく、彼女の泣き声が高く響いた。浜手から手まねきしながら言うには「もうしもし！どのような目つきのどんな顔つきのお方がイヨチびとなのかも知らずに、こうこうしかじかと兄さまがわたくしに言い聞かせてイヨチに嫁に寄こしました。わたくしは気が進まなかったけれど、兄さまの言いつけを守って、イヨチにやって来たところ、かくかくしかじかの衣装を着たお方が『イヨチびとだ』と言って、道の途中で **p.36** わたくしたちは出会いました。

そのような衣装を着ているのだから、わたくしはまことのイヨチびとだとばかり思ったので、その方のおっしゃるとおりにしたところ、気づいたら、意外にも極悪の化け物凶暴な魔神がイヨチびとに化けて、わたくしをポウッと何も解らなくさせ、今わたくしは当たり前でない死に方をしようとしています。

おおあわれ、ああ悲しい。幼いころから悪い行いをしたり、悪い精神を少しも持ったことがなかったのに、どうしてわたくしにこのような罰が当たるのでしょうか。身分高い淑女の家系の年端もいかぬ少女であるわたくしだったのに、どうして侮辱されるにしてもただならぬ辱めを受けるのでございましょうか。このようにわたくしがされたことを **p.37** 兄さまはまったく気づかずにいるでしょう。

それゆえイヨチびと、わが夫になる人よ。わたくしをかわいそうに思って、今わたくしが化かされたことをポンテセウの兄さまに知らせてくださいまし。今にも本当にわたくしは死んでしまいそうなのでございませう」と彼女が言った—とわれは思った。

すると、笑い声や物言う声がパウパウという狐の鳴き声といっしょにわき起こり、はるか遠く、再び^{かんぼくりん}灌木林のかみて端で跳び比べ踊り比べするかのよう^{かんぼくりん}にわれが思った—そのとたんわが目の先がサッとふさがった。

4-4 目が覚めたら

気づいたら、今はもうすっかり夜が明けていた。それなのに姉上はまだいびきをかいて熟睡している。われは非常に驚いたものだから、山熊のように力いっぱい伸びをして寝台の上に飛び起き、着がえをした。

p.38 宝壇の上にあるわが衣装を取りあげ、メナシサムの厚司を上に着て、かなぐさりのベルトをぐるり胴に巻き、神からさずかった太刀を腰に下げた。メナシサムの兜を頭にかぶり、トゥルルの杖をむずとつかんだ。

姉上は物音がするのをあやしみ、寝台の上に飛び起きてわれを見た。われが身支度している様子にただふつうに目を丸くして驚くだけならいいのに、座敷の上にサッと立ち上がり、目を何度もこすっている。その上で言葉を差し入れるその声がかうあるには、「何だってまあ、わたしは死んだように眠ってしまったのかしら？わたしの弟ぎみはどうしたわけでわたしより先に起き出したのかしら？そなたは何かに驚いたみたい

に、**p.39** どこかに出かけて行くつもりなの？」
姉上がそうおっしゃるから、われが言ったことがかうあるには、「これこれ、姉上よ。さあ、早く火を焚いて待っていてください。夢かうつつか、何ともまあ気味が悪い気がするから、わが狩り場にある木わら（川端の灌木林）の周辺をよく見まわってから戻ってくるよ」とわれが言ったら、姉上はたいへん驚き、「なんともまあ！おっしゃることは大変なことじゃないかしら。神々と一族のようなそなたゆえ、えらい憑き神に守られているそなただから、何か恐ろしいこと重要なことの前兆をそなたが夢に見たのでしょうか。男は **p.40** 歩きながらでも跳び走る最中であっても、たくさんの尊い神々あまたの位高き神々に見守られ振り向かれるのですよ。よくよく気をつけてお行きなさい。わたしは神の意におまかせしておりますよ」と姉上と言う声を聞きながら、荒々しくわれは大股で歩いて^{おもや}母屋入り口のすだれを肩ごしに跳ねあげ、入り口の土間を歩いて家の外へ出た。

4-5 館の外観

今初めてわが館の外観を見知った。低地ででも育てられていたのであろうとばかり思っていたのに、ぽこんと独立した山が天空にそびえ立っていて、その山頂にこの大きな館と **p.41** この山城が重なり立っている。その中でわれは育てられたのであった！館の外観、山城の外側のそれこそ飾られている様子や美しいその様子を跳び走りながら眺めたら、何から何まで好ましくすばらしい。

館の後ろにある^{ぬさどころ}幣所は島のように見えるほど立派で堂々としている。はたして思った通り祭壇の東のはずれから霞の橋がかかっており、その先がわが里川の川上に伸びていてキラキラ明るく輝いていた。

その橋の上にわれは立ち上がった。何神か何びとかがわれに憑いているのだろうか。わが頭上にパーンと音がし、たくさんの尊い神々あまたの位高き神々たちがわが頭上で爆発した。走る神風の風先にわれは軽々と吹き上げられ、上流めざして **p.42** 神風を走らせて行くうちに、遠い林の川端林野のかみてにわれは到着した。

4-6 化け狐退治

そのうちに眠っていたのか夢を見たのかしたように思っていたところ、はるか遠くの灌木林のしもての端から、男の笑い声と狐のパウという鳴き声が唱和して木々のあいだにわき起こった。

その声がこだまになって響いてきたと思ったとたん、若い娘の泣き声が高く響いてきた。その声を聞くと、勇士の血を引く族長家系末裔のわれであったが、ほんとうに不憫を覚えた。どのような生まれのどんな容貌の方なのかお気の毒になあ、あの泣き声は本当に可愛そうだと思いながら、[p.43](#) 大木の陰にビタッと身を寄せていたところ、何者かが今わがすぐそばに跳ねて来た。見れば、はたして思った通り夢の中で見たとおりであった。

われが飛鳥のごとくトゥルルの杖を高い所から振りおろす音シュウとなる。^{ニツネ}極悪の^{カムイ}神がわれを目撃してこちらを向いた瞬間に、われがそいつの腰骨なかばを殴りつけた音が手先にドスンと響く。そやつ^{ニツネ}の腰骨が折れる音がボギッとして大地に突き刺さった。

凶暴な怒りがわれに勃発し、われは渾身の力、腕いっぱい^{ニツネ}の力をしぼり出して殴りになぐりつけた。その上で数々の悪口雑言をそいつに浴びせてやった。

「極悪の神がいかなる理由にもとづいて [p.44](#) われに化け、かわいそうにポンテセウ姫をずいぶん長い間からかい、じらし、化かしたのか。

われはありきたりの男であるから、お前が人を化かしてこのように悪戯したとしても、さあ、見ておれ。お前がやりたくて、気分よく悪戯していたようだな。さぞや神とあがめられえらくなれるだろうよ。さあ、俺がささやかな返礼をしてやるからな」とわれは言いながら、奴をかかどで何度も蹴りつけ地べたにさんざん踏みつけた。腐った倒木みたいになった奴をボカボカ殴っているうちに、とうとう骨くずになるまで粉碎した。われは皮だけになった死骸を遙か彼方の山かげに投げ捨てた。

4-7 ポンテセウ姫の死

そうしているあいだポンテセウ姫は大地に根をおろした柱のように [p.45](#) 棒立ちになり凍ったように立ちすくんでいた。

われは彼女のほうに跳んで行った。姫はわれの方へ向き、われの顔を半分まで目撃したところで、「キャー！いやあ！」と言うやいなや硬直した死体が長々と伸びた。

美しい着物はビリビリに裂かれ、肌もあちらこちら露わになっている。可哀想に。うら若い娘が清らかな大事にして来た肌を露わにされて、異常な死に様にされたのだから、本当に心の底から可哀想に思い、勇士の血を引くわれであったが、熱い涙をはらはら流す。

われは自分の帯をくるくるほどき、肌へじかに着ていた肌着を脱いだ。娘が着ているものを全部脱がせて、わが肌着 [p.46](#) でくるみ、娘を小脇に抱えて天空上に高く飛び上がった。

川づたいに吹き下りる風に身をゆだね、われが空を駆け行く音ゴロゴロと鳴りひびく。

第5章 魂呼びの呪術

5-1 イヨチに帰還

わが館に到着し、われは物見櫓の上に鳥が木の枝に止まるそっくりに舞い降りた。われが急いで館のそばに飛び下りる音ドシンと響く。

われは入り口土間を通過して母屋入り口のすだれをフワリとゆらし、内土間に滑るようにサッと入っていった。

姉上は非常に心配していたものだから、深い憂いの色を顔面に浮かべていた。内土間に入って来たわれの方ふり向き、びっくりして目を見張っている。

われは姉の両膝の上に娘の骸^{むくろ}を置いた。姉上は本当に驚いてホーイという危急の声 *p.47* をあげてから、「これはこれは！こんなことを見ることがあるなんて。可哀想に、わが弟殿は、どこからこの方を抱えていらしたのか。困った、どうしたらいいのかしら」と言って狼狽した。

「姉上よ。さあ早く手を貸してください。神に乞い願ひ、神がわれらを哀れに思ってください、この若い娘ごが生き返ったならば、それからこの事柄についてわれは語りもし、尋ねたいこともある。まことに不思議でならないから」とわれは言って、横座にある宝壇の真ん中から金属製のつづらをひっぱり出した。幾重にも縛ってあるひもを次々とほどき、われは上蓋をパッと払い落とす。

5-2 魂を迎えに行く刀

つづらの中から魂を呼び戻す呪術刀 *p.48* 一対が、こがねの中から掘り出されたみたいに、氷がキラキラ輝くように飾り立てられた宝刀の霊なる光が、館いっぱいにも明るく照り輝く。われはいい気分で宝刀を取り出した。

姉上は娘を右座のわきに寝かせ、われらは娘の胸の上に両側から一対の刀を一本ずつ置いた。

われはあぐらを組んだ膝に娘の頭を載せた。今こそ数々の神の起源や根源を解き明かして神助を乞い願う。わが弁論^{チャランケ}はカッコウの鳴き声のように明瞭に響いてこぼれ落ちた。何とまあ、われは弁舌爽やかだったろうか。発する言葉はわが唇から淀みなく出てくる。

姉上は何とまあ、美しい声で謡ったことだろう。巫術の歌声は *p.49* のど奥で絶妙な小節^{こぶし}となり、祭られた神が天に還る時のように美しく唇から発せられた。その合間合間に娘の胸にフッサフッサという蘇生のための密やかな息吹を吹きかける。

5-3 生き返った姫

われらが懸命にやっているうちに、神の思召しにより、いつしか娘の顔にだんだん血の気がもどってきた。足の指先がかすかに反り、まつげの先もヒクヒク動いていた。

われら二人は本当に喜びながら懸命に続けていると、娘は目を開き、われの顔を半分まで目撃すると、またどのように見えたものか、「キヤー！いやあ！」と言ってコチコチの固い骸に戻ってしまった。再びまたわれらが懸命に魂を呼び戻しているうちに、今度こそ本当に命を取り戻したことがわかった。

娘はゆっくりと遠慮深く顔をあげて、泣きながら下座からにじり進んできた。 *p.50* 内心では『これで本当に命を取り留め生き返るのだろうか』と心配していたのであったが、神の偉大な霊力でもって、とうとう本当に命を取り戻したことがはっきりわかったので、われは心の底から神に感謝した。

われはいちばん上席である横座の炉端にどっかと座り、娘のからだを隅々までじっくり眺めた。何とまあ！美しくてよい器量であっただろうか。髪の毛は絹糸のようにその頭上に広がっておおいかぶさり、髪の毛の下には神々しいお顔は真昼の太陽のようにまばゆく照り輝いて、いれずみで青く染まった口の周辺は明るくさえざえとしている。

彼女はすっかり疲れきり、空腹でもあるもの **p.51** だから、顔色も生気を失い沈んだ冴えない色をしている。しかし、神の姿のようになった自分のからだを眺め、ただふつうに恥ずかしく思うのであるならいいのに、たくさんの涙、数々の涙にかきくれた。

姉上は起ち上がり、黄金色の神々しい刺繍着を重ねたのを若い娘のからだにさっと広げ、たくさんのいいこと幾つものいい言葉をかけてなぐさめると、娘はなんとまあ聞きわけのいいことだろうか。左座のすみへひざ立ちでにじり進んでその着物を着た。

姉上は娘の手をとって炉端に座らせた。薬草を煎^{せん}じる小鍋を炉かぎにかけ、煎じた薬をお椀に入れて娘 **p.52** にすすめたところ、娘は慎み深く受け取って椀を高くささげ低くささげて拝礼してから、効き目ある薬の薬効の気を飲み込んだ。娘がたちまち元気になったことがわかり、われらはもうすっかり安心した。

とあって語り手が変わる。

第三部 再びポンテセウ姫の語り

第6章 イヨチの館で

6-1 気がついたら

本当にどうしたことなのでしょう。わたしの気持ちはわけ解らなくなっていました。誰やらの声、何やらの音の合間合間に、幾度も幾度も目を覚まそうとしては覚めきれず、うつらうつらして気が遠くなってしまふ。

そうやっていて、どれほどたってか今ようやく正気に戻ったので、耳だけはちょっと聞こえるから聞いていたところ、何の声なのでしょう？人の声なのでしょう。若い青年がしているチャランク談判の声がカッコウの鳴き声のように **p.53** 明瞭に下にひびき落ちてきます。何とまあ、雄弁なことでしょうか。祭られた神が天に戻るみたいにのど奥から出す小節を美しく響かせながら、数々の神の起源や根源を解き明かして神の助けを乞い願うその声であることがわかりました。

と同時にまた、若い声つきの女性が泣きながら唱える巫術の歌声にわたしは気がつきました。わたしにきとう祈祷して助けようとしている方々がそのように唱和していらっしゃることがはっきりわかり、心底驚いてしまいました。どなたかの膝のうえにわたしは頭をのせているように思われ、今度こそわたしは目を見開きました。

まさかまたそんなものを見るとは思わなかったのに、あのメナシサムの厚司や兜とトゥルルの **p.54** 杖を持っていた者、『イヨチびとだ』と言ってわたしにシラミとりをさせた者の顔を半分まで見ただけで、わたしは非常に驚いたものだから、「キヤー！いやあ！」と言ひ、それっきりよい夢のように心でわかりつつも気が遠くなり、どうしたのかわたしは意識を失ってしまい、どれほどたってからか、やっと目が覚め正気に返りました。

相変わらずわたしへかじきとう加持祈祷する声が声高に続いています。そのようだから、いつまでもこのように自分のために骨を折らせていいのかしら？とわたしは思いました。

6-2 思い感う姫

思い切って勇気を出し、頭をあげて眺めてみると、まあ驚いた！こんな大きな家の中でわたしは目を開いたのです。ポンテセウのわが家の調度品と同じくらいか、いやそれにも優るでしょうか。家の中いっぱい

の調度品が美しく飾られているようすはどこもかしこもすばらしい。

p.55 下座へわたしは膝立ちで進みました。自分のからだを調べて見ると、男が着る金糸銀糸の豪華な衣装たった一枚にくるまれてわたしはいたのです。

おおあわれ、ああ悲しい。年端もいかぬ少女であるわたしなのに、凶悪な魔神がわたしをたぶらかしてわたしに踊り跳ねさせ、あんなに化かされてしまったわたしだったのに、そのような方が女性と一緒にわたしの命を取り戻すために神助を乞い願う声を聞いて、イヨチびと姉弟であることがわかりました。

あのように魔神がわたしをもてあそび、わたしを殺そうとしていることをどうしてイヨチびとがお分かりになったのかしら。山奥の狩り場の出来事をたった今夢のようにわたしは思い出しました。

乙女の大事にしてきた肌も露わにされて、**p.56** 当たり前でない辱めを受けたこともはっきりわかりました。

と同時に、わたしは恥ずかしいことではあるけれども、同じ一族の同性にわたしのあられもない姿を見られたのならば少しはいいのだけれど、きっとイヨチびとがご自分の着物をわたしに着せたのだと思うから、ほんとうに恥ずかしくなりました。『わたしが生まれ育った故郷ポンテセウ村に引き返すか、いっそのこと絶対誰にも見つからない所でわたしが死んでしまったほうがいいのかしら？』と思ったら、もうどうしていいかわからない。たくさんの涙泣きの涙にわたしはかきくれました。

p.57 どのような目つきのどんな口つきのお方なのか、話に聞いていたわたしの許婚者の姉上のお顔をわたしはまだ拝見していないけれど、泣きながらたくさんのやさしい言葉をわたしにかけながら、わたしの頭を何度も撫でさすり、ただふつうにわたしに同情し可哀想に思ってくださいるのであるならいいけれど、刺繍着だの絹の帯やら神々しい鉢巻きをみな揃えてわたしに差し出しました。

そうなさるから、わたしは言われるままにその衣装を身に着けましたが、わたしはすっかり疲れきっていて今にも疲れ死にしていそいそでした。

姉上は炉端にわたしを座らせ、効き目ある薬草を煎じてわたしに飲ませました。わたしはごくごく飲んで、今度こそ薬効は心臓の隅々までいきわたり、わたしはたちまち元気になりました。

6-3 イヨチ姉弟

今こそ初めて右座の **p.58** 炉端に座っているお方をわたしが見ると、まあ驚いた！ 許婚者の姉上と言うからには、もっと年上の者を言っているのかと思っていたのに、わたしより一歳ほど年上らしい若い女性が、大切に育てられた方にちががなく、着物も上等なものばかりを重ね着し、耳には神々しい耳輪、胸元には美しい首飾りをぞっくりつけ、神々しい顔が首飾りや耳輪などの光で照り輝く神のお姿のように美しいお方で、ほんとうにわたしを可哀想に哀れに感じるものだから、涙が流れ落ちた両頬がただれています。

横座にはメナシサムの厚司と兜が神々しく安置されていて、**p.59** 何の声も何の音もしません。そのうち神のようなお方が、声を鈴の音のようにひびかせ物言う声がこうあるには、「これこれ、育ての姉上よ。われの言うことをよく聞いてください。そなたは先に生まれた者であるから、先祖の遺言は全部ご存知であります。まだそなたはわれに先祖の話をお聞かせおらぬ。それゆえわれは本当にどんな祖先を持ち、どんな同族がいる者が自分なのか少しも知らなかったのだが、ゆうべの夢でこうこうしかじかのことを見もし、かくくしかじかのことを聞きもしたのだ。ただの夢でも見たようだとは思ったが、われがそこへ行って見た

ところ、はたして思った通り **p.60** のようであった。本当にわれは驚きあきれた。

神の思し召しによって幸いにも若い姫をわれら二人で生き返らせた。まこと嬉しく、尊い神にわれは大いに感謝いたします。われはすっかり安心いたしました。すぐにも今こそ何でも先祖からの教えはこうなのだとのままに神のすぐおそばで全部言ってお聞かせください」おっしゃったところ…。

6-4 イヨチ姫のウバシクマ

若い婦人は聞くやいなや、ただふつうに目を丸くするのであるならいいのに、パッと頭をあげ吐く息が止まるくらい驚いて、ややしばらくの間そのまま固まっていて、やがて話し出したことには、

「これはこれは！わたくしが聞いた感じでは何だか変ですワ。何でその話がこんなにおそろしく感じる **p.61** のかしら？

幼い頃からただ噂にだけ聞いていたのが、このポンテセウ村の神のような方々でありました。なるほどどこか遠く離れた村にそのような方々がいらっしゃるとしても、心の中では腑に落ちなくて、いつときも早くその方々に関する事柄を聞きたいなあとばかり思っていたところ、このことを話すのですか？

幼い頃からわたくしが聞いたところによれば、その昔、ポンテセウの村長とオタサムびと一半分神で半分人間である者がポンテセウの村長と一緒に食べ合う親戚となり、かわるがわる仲よく行き来しているうちに、お互いの **p.62** 妹同士と結婚し、夫婦となって本当に幸せに暮らしているという評判がたてられているうちに、両方そろって男の子一人と女の子一人ずつ産まれて、さらにその子たちをまたお互いに揺り板に乗っておむつをしている頃から許婚者同士として育てようと約束しました。それで安心して子どもたちがまだ幼いうちに、ポンテセウの村長夫妻はお二人そろってお亡くなりになってしまい、その後で神のような方々はそろって妹さんを育てていらっしゃると、このようにわたくしは聞いて育ちました。

わたくしたちはまことのイヨチの住民です。わたくしたちの両親もポンテセウ村の神のごとき方々たちとは少しも血がつながってもいません。 **p.63** オタサムの神のごとき方々にしても同じようにわたくしたちとは親戚ではないのに。ポンテセウびとが話したウバシクマ（言い伝え）や教訓はまったくまちがっています。どうかして、わが弟殿の装束の評判を聞くかしてそうおっしゃったのかしら？

ちょうどその時また悪狐くされ狐奴にしても、どこにまあ、わが弟殿をよく知っているものみたいに化け、弟殿のことばつきで話しかけて、もう少しで若い姫はすっかりだまされるところでしたが、いいあंबいにわが弟殿に強い守り神（憑き神）がついているおかげで、幸いにも極悪の神に仕返しをした **p.64** そうです」とおっしゃいました。

6-5 兄さまは愚かな大馬鹿者？

ただ聞くだけでしたが、わたしはまた驚いてしまいました。たとえ兄さまがまだ小さい時だったにしても、こんなにも忘れられるものではないのに、先祖の起原や言い伝えの話をとんでもない大間違いして話したとは！兄さまより遙かに若い婦人でさえもこんなにも見事にしっかりウバシクマを語ったというのに。解き明かされているうちに、兄さまがわたしを一人っきりでイヨチに寄こして、気が進まなかつたいきさつだの、とんでもない辱めを受けたのに、神のごときイヨチびとが **p.65** いらしたおかげで、わたしは命を助けられたことに納得がきました。今気づいてみれば、よそ村の勇者であった方に、どこの馬の骨だかわからない、

みるかげもないみじめな様子の娘の肌をお見せしてしまったのです。ほんとうに恥ずかしくて動こうにも動けません。

ひょっとしてポンテセウの兄さまはお馬鹿なひどい愚か者なのかしら？と思ったら、猛烈に腹が立ってきました。

6-6 イヨチびとの判断

イヨチびとは姉上イヨチ姫が言うのを聞いて、ややしばらくの間じっと息を止めていらしてから、やがて話し出したことには、

「そのようなことならば、極悪の神がずいぶん前からポンテセウ姫に憑いて待ちかまえていた *p.66* のであろう。ポンテセウびとにしても凶暴な魔神の術でそう言わせられたのであろう。

そのようなことならば、もう今はこれに関することはすっかり神にお任せしてみましよう。噂というものは速く伝わるものだから、ここにポンテセウ姫が二、三日いるうちに、ポンテセウやオタサムからでも何か知らせが来るにちがいない。それゆえそれまで静かにしておきましょう。わけがあつて姫をここに置くのです。

p.67 それゆえ怖いことは少しもないのですよ。」とおっしゃれば、イヨチ姫も「そうですとも。わが弟殿には少しも罪はありません。極悪の凶暴な魔神が呪ってわれらの仲を裂こうとしたのです。」と言って、今こそ本当にわたしたちの祖先の素性がはっきりわかったものだから、彼女は自分の鼻をつかみ口をおさえて驚く仕草をしながら、改めてわたしを何度も撫でさすり、わたしの無事を泣いて喜びました。

それからイヨチ姫は立ち上がり、心をこめた煮炊きにかいがいしく立ち働き、一番先にイヨチびとに食膳を捧げました。

わたしにも大盛りの高盛飯をよそわれ、捧げられました。わたしはとても空腹だったものだから、この高盛碗に拝礼して、ゆったりした上品な動作でいただきました。

わたしが食べるようすを神のような方々は見て、*p.68* 本当に喜び、安心したことがわたしにも解り、一同も食べました。

6-7 食事しながら

食べながらつくづく思い出せば、わたしはほんとうに情けなく口惜しい。育ての兄がほんとに恨めしい。誰かにわたしを送らせたなら ^{チロンスフ}悪狐の ^{ニッネ}悪神があれほどまでわたしを ^{もてあそ}玩ばなかつたらうと思ったら、猛烈な怒りが湧いてきました。

どのような顔つきのどんな育ちのお方がこのオタサムのわたしの親戚であるのか、身内同士で許婚者として育てたことを、意外にも他族の女性でさえもよくご存知なのに、わたしのくされ兄は何を言ったのかしら。

神のような方々は声高に *p.69* 言い立てずに、あのように親切で優しい言葉で言ったとしても、腹の中ではどんなにかまあ激怒し忌々しく思っているに違いないと思えば、ほんとうに心の中ですまなく思いました。この体験は一生絶対忘れないと思います。神のような方々にどんなお返しをしようかと思ひめぐらせながらわたしは食べました。

それから神のようなイヨチびとは、宝壇のそばの一段高つくられた立派な台座が伸びているその上に上がって休むように思われました。

わたしもすっかりくたびれました。イヨチ姫は夜具の小袖を p.70 運んで来て、左座に心地よい寝床を美しくととのえ、そこにわたしを休ませました。

6-8 つかの間の平穩

それから二日三日ほどそのようにして過ごしました。どうしたらいいのかしら。わたしが勝手にポンテセウ村にもどってもいいのか尋ねることさえ遠慮しました。イヨチびとは、薄くかけるもやに包まれ、刀の鞘を彫る音を立てていらっしゃいます。

わたしは炉端に座り、頭を深く垂れ慎み深くかしこまっておりました。

右座に座るイヨチ姫もわたしに何かもの言いたげにいらしたけれど、わたしの心をまるで見透しているかのように慎み深く頭を下げていらっしゃいます。

第7章入り江の向こうから

7-1 あやしい喚声

とある日のこと、一方の入り江がわから p.71 何の声なのでしょうか？何か人々が激しく責め騒ぐような声が聞こえました。

おそろおそろイヨチびとに向かってわたしが顔を上げると、イヨチびとはこれらの声が聞こえたのか聞こえなかったのか、神窓の^{すだれ}簾の方へ何度も振り向きながら彫り物をしているようすです。

イヨチ姫にも聞こえたらしく、じいっと耳を傾け聞き入っており、何度も宝壇そばにいるイヨチびとに術でもって見せても、イヨチびとは、少しも振り向いたり顔を向けたりすることはありません。イヨチ姫は何かもの言いたげにいらしたけれど、遠慮して勇気がないものだから、幾度も幾度も口中にたまった生唾をくり返し呑み込んでいる様子をわたしは見て、ほんとうにお気の毒に思いました。

p.72 わたしも何か恐ろしいことでもあっての声じゃないかしら？ともう少しで外に出て見たくなりそうになったけれど、主人側であるイヨチ姫でさえも弟ぎみに遠慮して彼の判断に任せていらっしゃるのに、わたしが勝手に外に出て行くこともできません。そのことにも何か変だなど思いながらジッと聞いていました。

次第に近づいて来る大勢の人たちのフォホホーイとかフムツという^{おたけ}雄叫びの音が聞こえても、何か怪しむのがこの人間というものなのに、イヨチびとは少しも動じる気配もありません。

騒々しい声が突然急にぱったり止まりました。あたり一帯の音が消え、シーンとして何の音も何の声もしなくなりました。そのとたん何者かが p.73 館のそばで跳ね合う音がおびただしくドスドス響いてきたと思ったとたん…。

7-2 陸から来襲した軍勢

内仕事をする召使いたちが外へこぼれたように飛び出し、外仕事をする召使いたちが家の中へかけこみ、目の玉をギョロギョロむき出し、何度も何度も言い合いながら、異口同音にこうあるには、

「いざいざ、われらが仕える神たちよ。われらの言うことをよく聞いてください。

今日はあまりにも上天気だったから、われら召使い一同連れ立ってほがらかな気分で、たきぎ拾いや流木拾いに競い合い、笑い転げたりしながらいたところ、正反対の入り江側からどうしたことでありましようや！

長く連なった隊列が p.74 やって来ました。その上空には白い霧がもうもうとした雲になって群がり、その中に稲妻のような光がピカッピカッと光っているようです。まことにわれらは驚いて、声もなく突っ立っていました。

その来襲者らはもうわれらの村のしもてに到着しました。見れば、この大勢の鎧を着た隊列はどこまでも肩を連ねあって、全員がまさに氷のような光を放つ抜き身の刀を手を持って、互いにフムッフムッと力声やフオホーイという声を挙げながら刀を頭上に何度も伸ばして氣勢をあげ、^{よろいかぶと}鎧兜や鋭い刃の光を^{きぎり}狭霧のようにもうもうとした雲のように群がらせて来たのであります！

軍勢の先頭に総大将であるらしい若いお方が、まさに勇者にちががなく勇者らしい顔つきが p.75 きりりとしており、もやや後光のせいで見ることもできないほどです。^{いく}戦さ用の神から授かった太刀を腰に下げ、柄の短い槍を低い杖のように突っかって、たった今この浜に到着いたしました。

7-3 海から来た若者

それと同時にまた、はるか沖合に金色の小さな帆掛け船が布製の帆の下腹を風でふくらませながら、^{へきき}舳先に当たる波をザアザア蹴立ててわが里にまっしぐらにやって来て、波うちぎわに停泊しました。

先に来襲した軍勢がその船を怪しみながら立ち止まっていたところ、停泊した船の甲板から霞の丸い小山が矢の飛んでいくそっくりにスウッと飛んで、先にやってきた族長のすぐそばに鳥が木の枝に止まるそっくりに舞い降りました。

もやに包まれた青年らしい声つきの者が、鈴をふるわせるような美しく響く声でこうあるには、『どうしたことなのか？アイヌの村では遠くにある村でも p.76 近くにある村でも同じように大陸の^ヤ村では、お互いに助け合い、見ず知らずの他人でも泣きながら戦い、神々共々あわれに思うのだ。

村人たちが楽しく行楽している間に、われが遠い沖の方からやって来て、自分の前方を眺めると、たくさんのむら雲がわき起こっているのを怪しいと思った。非常に心配になって駆けつけたところ、はたして思ったとおり戦さが勃発したように思われる。

心配だ！どこかで何か問題が起こってそれが戦いの元となって、とんでもない戦さの準備をしているのか？どこかの村が戦いの元となつてのことなのか？おそれながらわれは聞きたし。

族長どのが p.77 どうして他族の村にそのような態度をとっているのか、われは不審を覚える。先に自分の村名を名乗るのも、あとから名乗るのもたいして差もないだろう。それゆえにそなたの村のお名前をお聞かせください』とおっしゃったところ…。

7-4 ポンテセウびとの言い訳

来襲した一隊の総大将はたいそう驚いたように思われました。

その隊長がこうおっしゃるには、『わが村の名はポンテセウでありまして、わが義弟殿オタサムびとと一族内でそれぞれお互いの妹同士を婚約者として育てよというのが先祖の遺言なのでありました。それゆえ、わが妹はもう結婚できるほどに大きくなったから、まずこちらから先にオタサムへ嫁入りさせようとして、われは妹にオタサムまでの道順を教えて、たった一人で p.78 行かせたのであります。とうの昔オタサムに到着しているであろうとばかり思っていたのだが…。

噂に聞こえてきたのは、まさかまたそんなことが聞こえるとは思わなかったのに、イヨチびとはメナシサムの厚司やメナシサムの兜とトゥルルの杖をその館に備えているという。われは非常に驚いて、よく思い出してみれば、意外にも、われが妹にオタサムと教えたのだと思っていたのに、イヨチびとの服装などを詳細に語っていた。

しかし、たとえわれが間違えて教えたとしても、イヨチびとの所に *p.79* わが妹が到着したならば、イヨチびとが、姉弟ともどもこのウバシクマを知らない他族であることが解った時点で、すぐわが妹をポンテセウに帰らせたのならわれは憤慨しないのだが、自分の所に引き留めて置いていて、いつまでもそのことについて何も話さないことや、わが愚かな妹も間違いであると解ったのに、一刻も早く戻りもしなかったことがまことにわれは腹立たしい。

このことが噂になってわが義弟オタサムびとに気づかれたら、われらはどうして助かるものか—とあって、われはひとりで心配していた。

そこで、われが死ぬつもりでイヨチ村を攻撃しようとしたら、わが親戚身内たちの大半はとても戦さは出来ない *p.80* 戦いは出来ないとわが腕をつかんで引き留めなだめた。

しかし、われは猛烈に腹が立っていたから、強引に開戦を主張し、イヨチ村に来襲しようとしたところ、そのうちありがたいことに族長イヨチびとが立派な態度をお示しになったことが聞こえてきた』と総大将が言ったところ…。

7-5 怒るオタサムびと

海からやって来た何者かはそれを聞くやいなややしばらくの間息も止まるくらい驚いていましたが、まさかまたそう言うとは思わなかったのに、今こそその言葉なるもの、ただ言葉だけではあっても、つき刺す如く斬りつける如く、もやの中から飛ばしてきた激しい憤怒の言葉がこうあるには、

『何をぬかすか！何ともま *p.81* ポンテセウびとであるわがくされ義兄は恥ずかしげもなく、よくもそんなこと言えるものだな。

汝がどこの村に行って戦さと呼びかけ戦いを繰り出そうとしたとて、誰がこれから聞く耳を持つだろうか。ただ嘲られ、おぞましがられるだけであろう。

イヨチの族長である神の勇者に汝が腹を立てたために、平和なイヨチ村に対して、神をも恐れはばからぬ全く度を超えて言う言葉がこれなのか。

イヨチびとの方から先にポンテセウ村へ戦いを仕掛けさせようとして、でたらめなウバシクマを妹に教え、他族である大将の村神の郷イヨチ村にたった一人で嫁に行かせ、その上で汝は戦さをしたがった。

本当にま *p.82* わがくされ義兄はあまりにも愚かで、考えが浅はかだ。イヨチびとをはずかしめるにしてもとんでもない恥辱を与えたものだな。

イヨチびとは雄弁な方なのに静観していることに乗じて、汝がでたらめなウバシクマを語った。それで、どこかの村から参戦の知らせがあるはずだと思っていたのであろう。

族長というものは善いことも悪いことも何ごとによらず、しっかり正しくその根源を確かめてから、できるだけ穏やかな配慮をしたならば、神でも人間でも喜んで、たくさんの国々をこえたたくさんの村々に評判を立てられるものなのに、わがくされ義兄のあまりにも愚かな了見は *p.83* こういうことだったのか？いっその

こと二切れ三切れにすぐにもしてやろうぞ』

と言うやいなや、総大将は兜の内側の眉間まで切り裂かれ、前から後ろまで痛々しい血が滝のように吹き出しました。

大勢の者たちは、聞くやいなや見るやいなや、ただふつうに恐ろしがるのならいいけれど、遠くまで次々と後ずさりしこっそり皆で逃げ出しました。

あの総大将もほんとうに驚き、言い返す言葉もないものだから、音も無く天空上に高く飛び上がり、何人ものもやで造った人、幾人ものもやで造った男を自分の身代わりに立てて、どこに行ったかわからなくなりました。

そこから別れて(?)海からやって来た方は甲板からこちらへ(?)まるで一本の矢そっくりに飛び立ったのであります」と

p.84 何とまあ！召使いたちは雄弁に報告したことでしょうか。口の中がほどけたようにまくし立てました。

7-6 姫の判断

ただ聞いただけでしたが、ああいまましい本当だろうか、あの育ての兄上がまあほんとうに自分の意志からの行動なの(?)かまあ、もっともっとわたしが怒るようにとばかり振る舞いああ言ったのかしら?なるほど、でたらめなウパクマを語ったいきさつがかくかくしかじかであって、わたしが命を救われたこともまったく知らないものだから、なおさらあのような振る舞いをし、あんなにもまあわたしが感謝しているイヨチの神のような方々に向かって無礼千万なことを、本当にただの言葉だけであったにしてもあのように言ったのだから、どうにもこうにも言いようがありません。神のようなイヨチ姉弟を本当にいっそうわたしはお気の毒に思いました。

p.85 神のおかげであのようにおっしゃって、育ての兄上を言い負かした者は噂に高いオタサムびとだど心の中でわたしは思いました。

育ての兄ポンテセウびと一あれほどの神あれほどの族長が本当にまああまりにも愚かで無礼なことをおっしゃったから、ほんとうにわたしは恥ずかしい。ひやひやするやら情けないやら思っていました。

イヨチのえらいお方は相変わらず何も聞こえないふりをして知らん顔をしています。

若い婦人イヨチ姫はいつものようにわたしに遠慮しているのであるならいいのですが、からだをまげてもしもじしています。

7-7 オタサムびと来訪

そのとたんに館のそばに人の足音が忙しげに聞こえてきました。女性であるならいいのですが、男性にちががなく、武具が触れ合う音の余韻を美しくチャリンチャリンカチャカチャと鳴らして、*p.86* 入り口の土間に回ってきました。入口の土間に鏗^{つば}のふちを打つ音がとても美しく鳴り響きました。

その何者か一母屋入り口のすだれをフワリと揺らして、内土間^{うちどま}に光ともやと共にサッと入って来た者を見て、濃い小さなもやの塊を、わたしが眼力で打ち払って見ると、まあ驚いた！イヨチびとほど立派な人はこの遠近を探してもいるまいと思っていたのに、それに匹敵するか、優る人でしょうか。

イヨチびとと同じ年頃らしく思われる者が、金糸銀糸の豪華な衣装の襟元や裾周りに幅広の平金をぐるり

と取り回したものを襲ね着し、金ぐさりのベルトをぐるりと胴に巻き、**p.87** 金色の兜の垂れ緒をギュッと締め、兜の下に神々しい顔が明るく輝いています。

着物の上に錦織の陣羽織トムヅクをはおり、その上面一帯に黒いもやが立ちなびいていました。神から授かった刀は鞘長にぐっと反っていて、鞘の表面にたくさんの美しい模様が飾りつけられた神刀を腰に下げ、脇の下あたりがきらびやかです。その上の方には和人の小刀がこがねの中から掘り出されたように氷のような光を放ち、その表面一帯がピカピカ輝いており、まったく面白くよい気分です。帯下左がわには和人の金色の小兜、表面が稲妻のようにピカッと光っているのを手に持っていました。

勇者にちががなく勇者の顔がその顔色の中にきわだっています。

内土間 **p.88** に立ち、ただふつうに館の中を感心するのであるならいいのに、穏やかに左座に向かって入ってくるやいなや、わたしの身を包んでいるもやをめざとく見てとり、顔色がさっと青ざめました。<やっばり思っていたとおりで>との方が考えたことがわかりました。

その方が声を高く響かせて物言う声がこうあるには、

「申し上げます。ただ評判だけを耳にしていたお方が、このイヨチびと神の勇者でありましたが、わがくされ縁者ウタリがあまりにも愚かすぎるものだから、どんなにかまおんみ御身が激怒しておられるであろうか。

われはオタサムびとであって、今までわれもまだ幼少でありまして、**p.89** わが至らぬ妹はろくでもなくて育ちも遅かった。われが育てているうちに、ようやくこの一年で一人前に煮炊きも出来るようになったから、たったひとりでわれは妹を館に残して、ほんの短い間と思いながら、倭人の国トノモツリへ交易しに出かけました。

倭人の殿様はまことにわれに親愛の情を示し、われもまた親しみを覚え、毎日一緒に過ごして引き留められていて、こんなに遅くなってしまいました。わが妹が心配になり、倭人の殿さまたちに別れを告げて急いで帰路についたところ、めぐり合わせでこのようなことを聞き、われは本当にひどい恥をかかされました。

もう何と言しようもしようもございませぬ。わがくされ同族がした悪行をあやまります。

真の勇者、族長たるものは、片方の言い分だけであまり気分を害するものではありません。さあさ早く、われらを助けると思って機嫌を直してください。

それと合わせて、これから後はお互いに他人同士であっても、共に飲み食いする—これがいわゆる食ウチべヘウ親戚イリカラと言われているもので、昔から時としては、まことの兄弟姉妹以上に最も仲がよいと言いますぞ。いかがかな？

本来なら少しだけでも御身が祭る火カミイの婆神フチの炉端に座って神々に謝罪や **p.91** お詫びを申し上げるのですが、今申し上げたように、われはしばらくわが館を留守にしてきました。それゆえ非常に気がかりなので、すぐにでも大急ぎで戻りたいのであります。

そこで、われはささやかな感謝のしるしを置いて行きたく存ずる。木幣イナウにいらっしゃる神々も欲しいものであろうから、われが交易で手に入れた品々—倭人の殿が飲む御神酒や倭人が食す米でも何でも、倭人が食べるおいしい甘いお菓子なども、その一部を立ち並んでいる木幣トのそばに置かせます。それゆえ御身の同族たちと共に神をまつって皆さまで楽しんでください。

それから、今ここにある倭人の殿の武装や着衣や大事な什器祭器をお詫びの印として、わが手ずから **p.92** 御身に差し上げたいのですよ」

と言って、倭の殿さまが着る羽織トムヅクを刀や兜とともに脱ぎ、ひとまとめにして上の方から差し出したところ…。

7-8 イヨチびとの返答

そうしたら高床の上から神のようなイヨチびとが立ち上がり、宝壇が置いてある上座にしびれた足を運ぶみたいにゆっくり大股に出て来ました。いつものとおり武具が触れ合う音の余韻が美しく響きます。わたしの後ろを通り、差し伸ばされたそれらのものを受け取って、高くささげ低く差し入れてささげて拝礼しました。

それからオタサムびとの手を強く握って、その上で話したことは、

「さすがは族長、勇士ゆえの何と素晴らしい神のようなご決断、*p.93* まことに見事な采配のお言葉、感謝致します。われはいささかも腹を立てても怒ってもおらぬ。

ポンテセウびとの家系が、ずっと遡った祖先から何代にも渡って多く勇者や雄弁家を輩出しているという話は、^{あまた}数多の村を越え評判を立てられている神のような方々であったのに、このように重要な昔語り^{ウバシクマ}をまちがって妹御に教えたことやイヨチ村に戦さをしかけようとする事だのは、まったくご自分の意志からではないとわれは思う。誰かわれらをねたむ者いたずらする者が勝手にしたのではないのかというようにわれは考える。

それゆえわれはただ神にのみ委ねていたのであったが、ただその評判だけを神々の噂としてわれが聞いていたオタサムびと神の勇者がいいあんばいにわが村の沖を通して下さった *p.94* おかげで、ようやく立派な裁定をして下さっただけでもありがたいのに、さらにまた、これからは飲み食いし合う一族としてわれらが行き来できるということは、まことに何にもまさる最もわれらが望んでいることであります。さまざまな神々が真にお喜びになる御神酒でも何でも上等なものばかり、甘いおいしい菓子もたくさんお裾分けしていただけるとのお申し出に対して、われは心から感謝し拝礼いたします。

神のごときオタサムびとがごゆっくりお立ち寄り下さるのであるならば、二、三日ともに過ごして、ウウェペケレやユーカラを語ったり聞いたりして楽しみたいとわれらは望んでいるのでありますが、そのように早く還りたいと *p.95* おっしゃるのならば、仕方ありません。どうせこれからは、しょっちゅう会うことになるにちがいないでしょうから」

と言って、手を取り合っかわるがわるさすり合う別^{ウコルイ}れの儀^{ルイェ}礼をしました。

まあ驚いた！どちらが器量においても弁舌においても優劣がつけられましよう。まことにもって同じくらいの風格と雄弁さを持つ勇士であることがはっきりわかりました。

第8章 オタサム村

8-1 別れ

イヨチびとがわたしに振り向いてこう言いました。

「さあ！ポンテセウ姫よ。オタサムびとそなたの婚約者と一緒に行きなさい。

たとえ神と呼ばれるものでさえも、時には何か間違いをするものだと言われている。ましてわれらは人間なのだから、どうかすると、しばしばもの忘れしていろいろ間違いをするものだ。*p.96* そなたの兄ポンテセウびとも物忘れした故にあのようだったにしても、幸い神のおかげでいい具合にわれはオタサムびとと意気投合した。われは少しも怒ってはいない。そなたが聞いたとおり今から兄弟姉妹として仲よくできるのだから

本当に喜ばしい。

そなたの嫁入り道具入れはここにあるから、背負いなされ」

イヨチびとは、いつのまにあのわたしの嫁入り道具を拾ってくださったのかしら？わたしは^{つし}慎み深いものだから、あたりをキョロキョロ見回すこともまばたきすることもせずに、いたところ、イヨチびとは高床のしもての端からあのわたしの荷を出して来てわたしのそばに置きました。

右座がわにはイヨチ姫が慎み深く座っていらして、とうとうわたしを嫁に送り出す声を聞いたから、ただあたりまえにわたしを名残惜しく思うのであるのなら *p.97* いいのに、起ち上がって、わたしのそばにいらして泣きながらわたしを抱きしめ、後でまたよき再会をしましょうとそれぞれお互いに頭から腕までさすり合う別れの挨拶をしながら言いました。

わたしはおそれ慎みながらイヨチウンクルー神のごときお方にも感謝して起ち上がりました。

イヨチ姫は外までわたしの荷物を持って出て、イヨチびとも外に出ました。わたしたちが館の外に出ても、神のごとき方々とたくさんの方の励ましの言葉を交わしました。

わたしたち三人はどうしてなのか何とまあ悲しかったことか。イヨチびとがわたしに背を向けて、深く濃い悲しみの色を浮かべる様子を見たら、わたしの方も心の隅々まで掻きむしられるように切なくなり、*p.98* 息の^{あな}孔もふさがれてしまったかのように苦しい気持ちになりました。

見れば、この壮大な祭壇その幣場のそばに話に聞いていたところの倭人の殿が飲む御神酒であるらしい何か大木の切り株みたいなもの大きな列や、色々な米俵の列の他に、何かの包みの大きな列があるのを見ながら、わたしは^{いいなづけ}許婚者オタサムびとのあとへすぐびったり付き従いました。

8-2 船出

海辺に出ると、まことの勇士であるらしい二人の青年たち一倭風の金糸銀糸の豪華な衣装を重ね着して、どこからどこまで感心するほど立派な風体の者たちが、今はじめてわたしに会ったものだから、うやうやしく両手の掌を上へ向けて *p.99* ゆったりと上下させながら^{オンカミ}拝礼しました。

^{なぎさ}渚から小舟に^{ロクンテ}乗せられて大船まで渡され、大船の甲板にわたしは座らせられました。

二人の青年は舟をこぐのに前後に身体を倒し倒し、オタサムびとは^{へき}舳先側^{かい}にいて、ともが^{かい}櫂^{かい}（櫂の一種）で海中をかき返し、かき回す度に体をぐっと後ろに反らしています。

沖の方から眺めると、立派なイヨチ村一帯ずらっと広やかに見渡せました。

村中央の山頂にある^{おおだて}大館の物見櫓の上に神のごときイヨチのお二方が並んで立ち、いつまでも見送っているように思われました。

沖に向かって輝くこの大船は舳先に当たる波をザアザア蹴立てて走って行き、わたしの耳元に風がうずまき起こる。

もうイヨチ村は見えなくなりました。

穏やかな^{なぎ}風の海面が *p.100* 広々とうち開けています。海面にゆらゆら浮かぶ海鳥や沖の鳥が水にもぐって餌をあさる声^{にぎ}がたいそう賑やかです。なんとまあわたしは面白く思ったことでしょう。ほんとうに朗らかな気分になりました。

しかし時々わたしの心は泣き死にしていまいそうになります。凶悪な魔神がわたしを^{もてあそ}び、とり殺そうとしたことを思い出すと、後ろへふり向いて、わたしは涙をぬぐっていました。

3 到着

どこかにわたしたちが来て、住民が少しばかりの村その村全体がずらっと見渡せました。村中央にぽこんと独立した山が天空に山頂高々とそびえ立っています。その村のしもてにわたしたちは到着しました。神のごときオタサムびとが到着を知らせる合図をしました。

(後編に続く)